

## 今回出された成績について

授業の難易度の中で、約半数の学生が「難しい」と考えていたことが分かりました。指導案づくりがメインだったので、模擬授業に入る前に、もう少し指導案づくりのノウハウを伝える必要があると思いました。

一方、週あたりの学習時間は、1～2時間であった学生が8割いました。こちらの想定通りだったので、安心しました。また、教員の話し方や説明の仕方も、概ね満足をしてもらったので、これからも、その姿勢を大切にしていきたいと思いました。

上記の第一の工夫の模擬授業について、教科内容・教材、方法の理論について、グループでかなりの差がでてしまった。深く議論していけるグループと、そうでないグループがある。全体の討論で、共有できるように試みたが、なかなかうまくいかなかった。

第二の議論については、上記の差のために、全体討論が難しかった。また、違いを明確にしたいくない同調主義の傾向があるのか、対立点を明らかにすること自体が敬遠されるようでもあり、対立点や論争点を明確にするのが難しく、深めたり、共有したりが難しかった。

出席回数、つまり提出作品数、及び作品自体のクオリティで成績を判定するのであるが、通常のレベルで8点、それよりも良いと9点、授業者と同等またはそれ以上だと10点、また通常より低いレベルは7点、授業をきちんと聞いていない(指示通りに描けていない)ときは6点を与えて、最終的に100点満点としている。今回提出した成績は、その数字のままであるが、概ねAが半分、Bが半分という結果であった。中にはあと1点で上位のランク(S、A、B)になる筈であった学生もいるが、成績は厳粛なものとして扱わなければならないという考えを貫いた。

教員として勤務する場合、あるいは音楽家として演奏活動に従事する場合、いずれも遅刻と欠席は許されないことから、「出席点」を特に重視して成績評価をつけるようにしている。さらに、「知っている／知らなかった」等の大学入学以前に身に付けた知識の多寡や「できる／できない」等の技能ではなく、授業を通じて身に付けた知識や技能の「伸びしろ」を重視して成績評価をつけるようしている。そのため、欠席ゼロで課題をクリアした学生には授業態度に問題の無い限りA評価を出すようにしている。結果として、A評価が大半を占め、受講者の割合によって評価を調整する相対評価ではなく、絶対評価で成績評価を判定することになる。実技を含む技能系教科では、相対的な評価は意味をなさないと考える。

- ・出席
- ・授業態度、積極性
- ・実技テスト
- ・レポート

これらを点数化し、総合評価とした

・教員に対してどのようなことを望んでいるのか把握し、将来教職に就く人たちに教科教育を教えること的前提は崩さず、相手に合わせて伝えていきます。  
教員の資質向上に役立てたら、幸いです。

ピアノ学習において初心者の学生は、練習時間をたくさん取ってもなかなか上手く弾けないと苦労していた様子だが、初心者同士で集まって練習したり片手でゆっくり練習したりして、何とか課題をクリアして感心した。

ピアノの経験がある学生も決して手を抜かずに丁寧に曲と向かいあってレッスンしている姿が見られて良かった。

音楽を聴いて評価をするのはとても心苦しい部分もあるが、学生ひとりひとりの個性や音楽性とまっすぐに向き合って評価できた。

実技の評価をも含め、まとめのテストも実施し、すべてを勘案して成績を出している。エビデンスを問われても答えられるようにしている。

授業時に制作等に熱心に取り組む受講生が多く、また授業以外にも教室に来て制作する受講生が多かったこと、さらに提出物の内容がとても良かったことから、全体的に評価が高くなった。

・「学生に授業前までにYou Tubeにある文部科学省作成の「小学校体育デジタル教材」を視聴させ、「疑問点」を付箋に一つ書いてもってくる。」ことを期待したが、実際は授業直前にYou Tubeにある文部科学省作成の「小学校体育デジタル教材」を視聴して慌てて付箋を貼って授業を始めることが多かった。視聴する観点を提示したり、他の運動教材を考えるような課題の設定をしたりするなど、ただ視聴させるだけではない仕掛けが必要であったと考える。  
・小学校体育の運動領域では現在、教科用図書が存在しない。そのため、補助資料(小学校体育の全運動教材をまとめたもの)や具体的な授業映像が学生の小学校体育に対する理解やイメージづくりにつながっていると考える。

課題はきちんと修得できていると評価できたが、出席回数2/3を満たしていない場合、ピアノを長期間習っていて高い技術をもっているにもかかわらず明らかに練習をしないで授業に臨み容易な曲を選択して課題をこなした場合など、修得技術の結果の評価が高いが授業態度に意欲が認められない学生の成績評価に苦慮しました。

ピアノを弾いたことのない学生の努力を成績に反映できるように考えました。  
弾く曲の完成度だけでなく、曲数や弾く曲の難易度も考慮しました。

学生がよく努力し、まじめに練習してくれたので良い評価の学生が多かったと思います。

成績は作品の出来栄え、授業態度と出席によって決めた。

授業態度もまじめで、努力をしている学生には高い評価をして、授業態度があまり芳しくない努力が感じられない学生には評価を低くし、学生が自分自身を振り返り納得のいく成績をつけるように努めている。

(2)で述べたようにまずは自分自身が体験することを第一に考えていますので、授業に出席して音楽に触れて感じることを、様々な音楽活動に意欲的に取り組むことを重視しました。そしてその体験から得たものや感じたことを言葉で表現した提出物も合わせて重視しました。試験では、授業で学んだ基礎的なことや、この授業を受講したまとめになるように、また改めて自分を振り返るきっかけになるように出題しました。それらを総合して成績といたしました。

出席回数、授業態度を重視。

・指導要領の理解と必要最低限覚えておきたい事項、指導者として必要な種々の実技の習得をみた。また、得意不得意ではなく、積極的に取り組む姿勢を大切にた。

多くの学生が非常によく努力していたと思う。ピアノの練習が好きか嫌いか、嫌いでも努力するかどうかということで曲の完成度が違ったものになってくる。総合的に判断し成績を出した。

平均点から考えれば、中庸な評定であったと思う。

最初の確認テストで合格ラインに達した学生が4割程度であったため、問いかけ方をかえたテストすることでその後の確認テストでの達成状況があがった。成績の現実からすれば、学生アンケートのちょうどよい評価は少し甘いように思われる。